

勝海舟宿泊の地 庄官戸口仙蔵邸跡(戸口家)

泉南郡岬町多奈川谷川

- ▶ 文久3年(1863)4月1日、勝海舟は大坂から紀州へ向かう途中、ここ多奈川に立ち寄り泊しています。
- 宿泊先は多奈川の庄官 戸口仙蔵邸で、現在も子孫の方がその地に住んでいらっしゃいます。当時の戸口家は、門前まで海に入り組んだ小湊になっており、小舟で屋敷へ入れたようです。現在の建物は、大正期に建て替えられたものだそうで当時の面影はありませんが、庭にある井戸は当時から残っているものだそうです。
- 庭は当時、お白州の場だったと言い伝えられています。
- 戸口仙蔵は、海舟日記にも記載されていますが、この地域(土浦藩領)で庄官を務めていました。文久3年(1863)、近くの淡輪(たんのわ)陣屋で「大砲御筒凌」という砲術の訓練があり、谷川村から戸口仙蔵の弟が参加したという記録があります。
- 勝海舟が宿泊した際、戸口仙蔵は海舟の目にとまり、「江戸に来ないか(あるいは一緒に来ないか)」と誘われたと戸口家では言い伝えられているようです。
- 戸口仙蔵は断りますが、子の亀太郎【その後通(とおる)に改名】は同行したかったそうです。



庭に残る古井戸



戸口仙蔵邸跡(戸口家)

勝海舟日記に次のような記載があります。

文久三年四月朔日

泉州田川へ泊す。此地は僻地、土屋采女正領所にて小湊あり。庄官 戸口仙蔵方へ泊す。途中より雨。
※田川(多奈川)は土屋采女正(土浦藩土屋家)の飛び地領でした。

2000年に続いて2007年9月に戸口家を訪問し、当主の方とお話することができました。

明治に入り戸口仙蔵の子 亀太郎は、政治家になりましたが私財を投げ打ってしまいます。

亀太郎の子は大阪に出て仕事で成功を収めます。

父の隠居場所として建てた家が現在残っている家です。

また、日本地図を描いた伊能忠敬も戸口家を訪れたことがあるそうです。

20 土浦藩(土屋相模守)此池築の碑

泉南郡岬町深日(棟合ノ谷)

- ▶ 江戸期、泉南郡岬町は明治維新まで土浦藩土屋家の飛び地領でした。その名残でいくつかの史跡がありますが、岬町棟合ノ谷にあるため池「古池」「新池」は、土浦藩土屋家によって人工的に作られた池です。場所は、国道26号線を大阪から和歌山方面に走ります。南海電鉄多奈川線深日町駅下のガードをくぐって峠を登っていきます。左手に南海電鉄本線が見えてきますが、1番目の小さな踏切がある細い路地に入り、山道(林道)を登っていきます。かなり登ったところに2つのため池「古池」「新池」があります。新旧同じ内容の記念碑が2つありますが、古い方は、宝永7年(1710)に建てられた碑です。表面には「土屋相模守此池築」と記され、両脇に「奉行 木村 茂兵衛」「奉行 山中 源太夫」と明記されています。
- この池は、約50日という日数と述べ人員6101名の労働力を費やして築られました。
- 山道ですので車で行くにはかなり無理がありますが、池で魚釣りをする人は車を利用しているようです。



宝永7年に建てられた碑



宝永7年に建てられたものと同じ内容の新しい碑



新旧並んで建っている



土浦藩によって作られた池

土浦藩について

土浦藩の藩領は、現在の茨城県土浦市で石高は9万9千石でした。
 藩祖は、下総 布川5千石から土浦藩3万5千石として入封した松平信一（のぶかず）です。
 その後、藩主となる大名家が松平氏→西尾氏→土屋氏→松平氏と入れ替わりましたが、貞享4年（1687）、土屋政直が藩主となってからは、明治維新まで土屋家が藩主でした。
 第17代藩主となる土屋彦直（よしなお）は、水戸徳川家から土屋家に養子として入った人で、幕末期ではこのことが藩の政局に影響を及ぼしました。
 領地は常陸（茨城県土浦市）だけでなく、和泉（大阪府）の一部や下総相馬郡など飛地領がありました。

土浦藩飛び地領について

泉南郡岬町は寛永7年（1630）以降幕府領となっており、勘定奉行配下の代官が支配していたようです。
 寛文2年（1662）以降は、大坂城代を務めた者の知行地として支配することになりました。
 貞享2年（1685）土浦藩の土屋政直が京都所司代、老中と昇進していき、この地は土浦藩土屋家の飛地領として明治維新まで継続して支配されました。